
研究ノート

瀬戸内海島嶼部における地域活性化の現状と課題

～直島（香川県香川郡直島町）を事例として～

古川 尚幸

I. はじめに

従来型の経済政策である国から地域への補助金や交付金が減少するなか、それぞれの地域では、経済の停滞や縮小が現実のものとなりつつある。このような状況を打開するための方策として、それぞれの地域で様々な地域活性化策が検討され、実際に取り組まれているが、社会のニーズとして、これからも地域活性化を求める声はさらに大きくなるであろう。

本稿では、瀬戸内海島嶼部における地域活性化を考えるうえで、その成功事例の一つとされている瀬戸内海に浮かぶ直島（香川県香川郡直島町）について、「現代アート」や「環境」を通して直島が辿ってきたこれまでの道のりを整理する。また、縁あって、筆者は2005年より直島に深く関わる機会を得ているが、直島に関わる立場から、直島が抱える地域活性化の現状と課題について述べてみたい。

II. 直島について

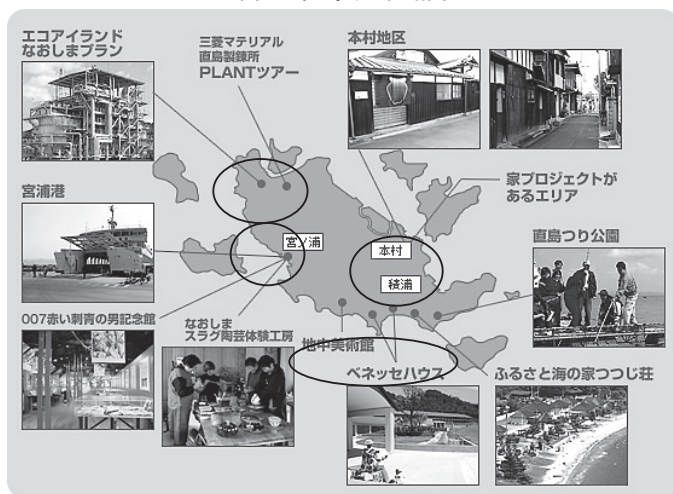
1. 直島の地理的位置

瀬戸内海に浮かぶ直島は、香川県高松市から北へ約13キロ、岡山県玉野市から南へ約3キロの備讃瀬戸に浮かぶ島で、大小27の直島諸島の中心に位置する（図1）。直島本島は、東西約2キロ、南北約5キロ、周囲約16キロ、面積は8.13平方キロで、人口は3,365名（平成21年1月1日現在）の小さな島である。香川県内においても平成の大合併が進むなか、直島町は、小さな島でありながら、合併の選択肢を選

図1 直島の位置



図2 直島町の概略図



(1)

出所：NPO 直島町観光協会 HP に筆者が加筆

(1) <http://www.naoshima.net/view/index.html>

ばなかった。その結果、直島町は、香川県内では唯一の離島のみで構成された町となった。

直島の東部には家プロジェクトが点在する本村地区が、また、島の西部には直島の玄関口である宮浦港がある。さらに、島の北部には三菱マテリアル直島製錬所が存在し工業地域を形成している。南部には地中美術館やベネッセハウス等、現代アートに関する施設がある（図2）。

2. 直島の現状

直島という名前の由来は、保元の乱に破れた崇徳上皇が讃岐に配流された際に、その途中、3年間を直島で滞在したとき、奉仕した直島島民の純真なことを賞して「直島」と名付けたという説もある。

これまでの直島は、古くは廻船業や製塩業で、大正時代から今日までは銅製錬やハマチや海苔等の養殖で栄えてきた。現在では、ベネッセアートサイト直島による地中美術館やベネッセハウス、家プロジェクトなどの芸術的要素、本村地区の町並みなどの歴史的要素、女文楽などの文化的要素、直島エコタウン事業のもと、三菱マテリアル直島製錬所によって豊島産業廃棄物を処理する中間処理施設が設置されたことによる環境的要素など、直島は様々な要素からなる特有の地域資源に恵まれ、近年、「芸術・文化の島」、「環境の島」として、日本国内はもとより海外からも注目を浴びている。

3. 直島で展開される現代アート

直島における現代アートは、ベネッセアートサイト直島が中心となり展開している。その現代アートの中核を成す施設として1992年にはベネッセハウスが、2004年には地中美術館がオープンした。その間、2001年と2006年には、それぞれ「THE STANDARD」、「NAOSHIMA STANDARD 2」などのアートイベントが開催され、直島が現代アートの島として名を馳せる契機となった（表1）。

表1 直島における主な芸術関連施設・イベント

1992	ベネッセハウス オープン
1995	ベネッセハウス別館 オープン
1997	家プロジェクト 始動
2001	THE STANDARD 開催
2004	地中美術館 開館
2006	NAOSHIMA STANDARD 2 開催

出所：筆者作成

さらに、1997年には、直島の本村地区において、古民家や神社を現代アートとして再生する家プロジェクトが始動した。この家プロジェクトでは、順次、「角屋」、「南寺」、「きんざ」、「護王神社」、「碁会所」、「石橋」、「はいしゃ」と作品が増えており、現在、直島に観光客を引きつける要因の一つとなっている（表2）。

表2 家プロジェクト

年	作品名	アーティスト名
1998	角屋	宮島達男
1999	南寺	ジェームズ・タレル
2001	きんざ	内藤 礼
2002	護王神社	杉本博司
2006	碁会所	須田悦弘
2006	石橋	千住 博
2006	はいしゃ	大竹伸朗

出所：筆者作成

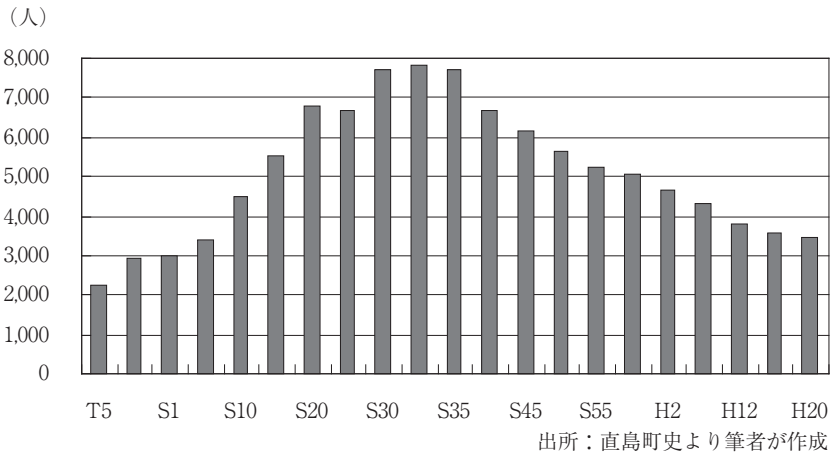
Ⅲ. 直島における地域活性化の現状～そのターニングポイント～

直島の地域活性化について考えるうえで、大きなターニングポイントとなる動きとして、つぎの3点を挙げることができる。1点目は三菱鉱業（現三菱マテリアル）による直島製錬所の誘致であり、2点目は藤田観光によるリゾート開発、3点目は直島エコタウン事業の受け入れである。ここでは、それぞれのターニングポイントについて詳細を述べる。

1. 三菱鉱業（現三菱マテリアル）直島製錬所の誘致

江戸時代には、幕府の天領として、廻船業や製塩業の島として栄えてきた直島であるが、明治末期から大正初期にかけての直島の逼迫した財政状態から、1917年に三菱鉱業（現在の三菱マテリアル）直島製錬所を誘致し、以来、この製錬所が町財政の基盤となり直島経済を支えてきた。その結果、1958年には人口が7,800名を超えるなど、瀬戸内海の他の島々と比べても、直島は飛躍的な経済発展を遂げてきた。しかしながら、過去には銅の製錬による煙害、現在では銅の国際価格の低迷による事業規模の縮小など、製錬所のおかれた社会環境の変化とともに直島の人口も減少に転じている（図3）。

図3 直島における人口の推移



このような状況ではあるが、2005年時点での直島における就業人口は1,728名で、産業別に見ると、第1次産業が162名(9.4%)、第2次産業が649名(37.6%)、第3次産業が917名(53.1%)であり、現在でも製錬所およびその関連会社が直島経済の基盤であり続けていることには変わりはない。

2. 藤田観光によるリゾート開発

1959年に直島町長選に初当選した三宅親連氏は、「自主的産業振興対策と観光事業の基礎確立」を目指し、直島北部については直島製錬所を核とした産業の場として、

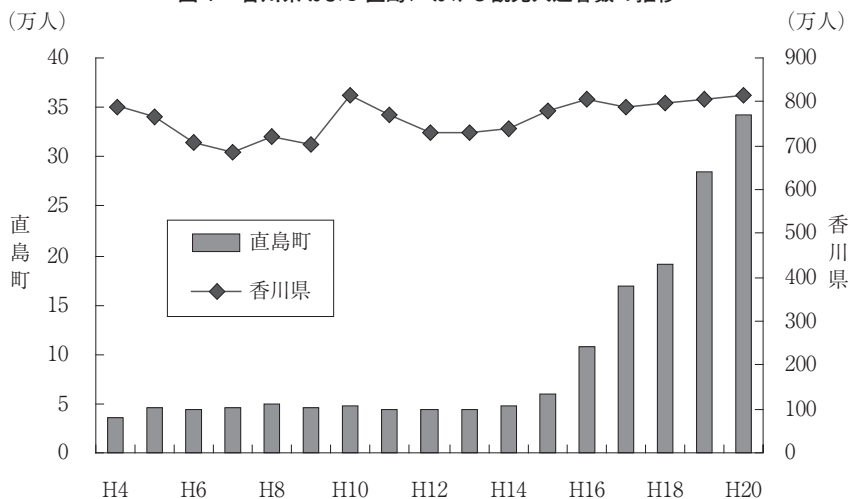
直島中央部については文化の香り高い住民生活の場として、直島南部は観光事業の場として、それぞれを位置づけた。そのなかで、1961年に藤田観光が直島南部に170万平方メートルの用地を取得し、直島の観光開発に本格的に乗り出した。しかしながら、その土地が国立公園特別地域であったため施設建設の認可が下りなかったこと、いざなぎ景気の終焉によりレジャー産業への投資が減少したことなどを理由に、藤田観光は直島の観光開発から撤退を余儀なくされる。

この状況を受けて、直島南部を教育・文化的なエリアとして再整備したい意向を持つ三宅親連直島町長と、瀬戸内海の島に世界の子供たちが集まる場所を作りたいという意向を持つ福武哲彦福武書店社長（当時）が手を組み、直島南部の開発に着手するに至る。

当初、直島南部一帯は、直島国際キャンプ場として整備され、進研ゼミを受講していた子供を主な対象に利用されていたが、その後、1992年にはベネッセハウスが、2004年には地中美術館がオープンし、現在では、現代アートをを用いた直島を代表する観光地として、成長を遂げている。

これらの成果のひとつとして、NPO直島町観光協会の発表によると、直島の観光

図4 香川県および直島における観光入込客数の推移



出所：香川県観光交流局およびNPO直島町観光協会資料より筆者が作成

入込客数は、2008年には約34万3千人に達した。また、香川県観光交流局の発表によると、2008年の香川県の県外観光客数は約814万人、香川を代表する観光地への観光入込客数は、屋島が約60万人、栗林公園が約63万人であることから、これらの結果を見ても、観光地としての直島の健闘をうかがうことができる（図4）。

3. 直島エコタウン事業の受け入れ

1999年に香川県からの要請を受けた三菱マテリアル直島製錬所が、豊島（香川県土庄町）に不法投棄された産業廃棄物を処理する施設の設置を受け入れ、これにより、2002年にエコアイランドなおしまプランが全国で15番目のエコタウン事業として国からの承認を受けた。このエコアイランドなおしまプランでは、「自然・文化・環境の調和したまちづくり」のコンセプトのもと、地域の課題である「環境産業の創出と直島町の活性化」、「埋立処分量の削減」、「豊島廃棄物等の処理に伴う副成物の再資源化」の解決のために、製錬施設を活用するリサイクル事業（ハード事業）と環境と調和したまちづくり（ソフト事業）を柱に、新しいまちづくりのモデルを構築しようとしている。

IV. 直島における地域活性化についての課題

前述の直島を取り巻く社会環境の変化のもと、直島は他の瀬戸内海の島々に比べて、一見すると、活性化しているように見えるが、地域の持続可能性という視点から見た場合、果たして真の意味で活性化していると言えるのだろうか。また、これまでの直島は、他地域と比較しても十分に特色ある地域資源を有するにもかかわらず、地域活性化という点で、これら地域資源を有効かつ総合的に活用してきたと言えるのだろうか。

直島における地域活性化の問題点の1つは、住民の危機意識の欠如にある。先に述べてきたとおり、これまでの直島における地域活性化は、主として、産官主導で行われてきた。三菱マテリアルの企業城下町として発展し、ベネッセアートサイト直島による「現代アート」でさらに注目を浴びるようになった直島は、瀬戸内海の他の島々と比べて経済的にも豊かであり、そこに住む人々の多くからは直島の将来についての

危機感を感じられない。これら危機意識の欠如という点は、他の瀬戸内海の島々では見られない、経済的に豊かであるが故の、直島の特異性であろう。しかしながら、倒産することはないだろうと思われていた大企業が次々に倒産する昨今の経済情勢や逼迫した地方財政の現状を考えると、これまでのような産官に依存したスキームでは、これからの直島の持続的発展は期待できない。産官に依存することのない直島の活性化を図るためには、地域づくりのリーダーの育成を急ぐとともに、地域を構成する主体である住民、企業、行政、大学がそれぞれの立場で積極的に地域づくりに加わり、さらにはパートナーシップを発揮して地域づくりを積極的に進めて行く必要がある。

V. 直島における課題解決に向けた取り組み

1. 行政による地域活性化への取り組み～エコアイランドなおしまプラン

エコアイランドなおしまプランでは、ハード事業として、豊島廃棄物中間処理施設等から産出される飛灰を処理する設備（溶融飛灰再資源化施設）および自動車や廃家電等のシュレツダグダスト、廃基板、銅含有スラッジ等を焼却溶融処理により可燃物や塩素等を除去する施設（有価金属リサイクル施設）など、新たな環境産業の育成による雇用の創出によって地域の活性化を目指している。また、ソフト事業としては、直島町のごみ減量化・リサイクルの推進（マイバッグの全戸配付）、環境教育・環境学習のフィールドづくりやエコツアーの誘致（三菱マテリアル PLANT ツアー）など、地域住民に対する啓発活動や来島者の増加による地域の活性化を目指している。さらに、このソフト事業を住民・企業・行政が一体となって推進するための母体として、「エコアイランドなおしま推進委員会」を設立し、住民主体の環境調和型まちづくり事業や環境教育・環境学習のフィールドづくり事業を行っている。

2. 住民による地域活性化への取り組み～地元住民団体「うい・らぶ・なおしま」

ここでは、エコアイランドなおしま推進委員会による住民主体の環境調和型まちづくり事業の1つとして、直島島民の有志による地元住民団体「うい・らぶ・なおしま」について紹介したい。このグループでは、島内外の人々の交流を目的として、エコTシャツプロジェクト、自然探検プロジェクト、緑いっぱい・花いっぱいプロジェクト

などを展開している。この自然探検プロジェクトでは、直島に生息する「海ホタル」を題材に観察会を行い、毎年夏休みに高松市ならびに直島町を中心に親子連れの参加者を集め、交流を図っている。

3. 大学生による地域活性化への取り組み

筆者らは、「地域」を「商品」として捉え、直島が有する地域資源の特性を評価し、さらに、この特性を活用した地域活性化について、その可能性を探るために、直島を訪れた観光客に対してアンケート調査を行ってきた。調査結果の詳細は別の機会に述べることにするが、そのなかで、2005年10月に実施した第一回調査において、観光客から見た直島がもつ問題点として、「特産品（おみやげ品）」や「食事・休憩ができる店」、「買い物をする店」が直島に不足していることが明らかとなった。

そこで、アンケート調査の結果から、観光客の直島に対する不満の1つとして、「食事や休憩ができる店」の不足が明らかとなったことを受け、観光客の不満の解消を目指すとともに、直島における新たな地域活性化のビジネスモデルの提示を目指し、「香川大学直島地域活性化プロジェクト」を組織し、直島においてチャレンジショップを運営することとなった。

この香川大学直島地域活性化プロジェクトでは、2006年8月5日にカフェ「和cafeぐう」をオープンさせ、現在まで継続的にカフェの運営を行っている。また、同プロジェクトでは、活動開始して以来、地域を構成する主体である住民、企業、行政と様々な活動を行ってきた。その一部を紹介すると、同プロジェクトでは、地元住民団体「うい・らぶ・なおしま」主催の自然探検プロジェクト「なおしま自然探検隊」の運営への協力や、直島町観光ボランティアガイド協会と協力し、学生による観光ボランティアガイドを行ってきた。また、2008年度については、直島において、ベネッセコーポレーションによる「米づくりプロジェクト」への協力や、期間限定ではあるが、香川県環境政策課とともに「観光ペロタクシー」の運行を行っている。同プロジェクトでは、今後も継続的に様々な分野で地域活性化を目指した活動を行う予定である。これらの具体的な取り組みについては、別途報告したい。

VI. おわりに

前述のとおり、筆者は深く直島に関わり、直島をフィールドとして研究・教育を行ってきた。その経験をもとに、本稿では、瀬戸内海島嶼部における地域活性化の現状と課題について、現代アートで世界から注目を浴びている直島を事例として述べた。そのなかで、今日の直島に至るまでの過程で、大きな影響を及ぼす3つの要因を示すとともに、直島の地域活性化についての現状と課題を指摘した。ただし、すでに指摘したように、直島は、他の瀬戸内海の島々とは異質な社会環境に置かれているため、直島における地域活性化の成功要因をそのまま他の島々へと一般化することはできない。しかしながら、直島における地域活性化の取り組みは、芸術を活用した地域活性化の事例として、何らかの示唆を与えるものとなるであろう。これらの詳細な検討は、今後の課題としたい。

参 考 文 献

- 香川県観光交流局『平成20年香川県観光客動態調査報告』2009年
梶脇裕二、古川尚幸「学生の起業体験における学びの「場」」『香川大学経済論叢』第81巻
第4号、2009年3月、155-169頁
企業メセナ協議会『いま、地域メセナがおもしろい』2005年
直島町史編纂委員会『直島町史』1990年
ベネッセコーポレーション『ベネッセコーポレーション1955-2000』2000年